



TITLE:

帝國統一後ノ獨逸ノ植民の活動(上)
(本誌第五卷第三號『獨逸ノ植民の
發展ノ起源』續編)

AUTHOR(S):

山本, 美越乃

CITATION:

山本, 美越乃. 帝國統一後ノ獨逸ノ植民の活動(上)(本誌第五卷第三號『
獨逸ノ植民の發展ノ起源』續編). 經濟論叢 1918, 6(4): 596-602

ISSUE DATE:

1918-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127353>

RIGHT:

京都帝國大學法學大科大學

經濟論叢

第六卷 第四號

大正七年四月一日發行

論說

『座』ノ研究(再ビ).....

文學博士

三浦周行

農會瑣言.....

法學博士

財部靜治

京都ニ於ケル舊時ノ墟屋仲間.....

法學士

本庄榮治郎

營業稅ノ課稅標準(二)迄.....

法學博士

神戶正雄

Unto this Lastヲ讀ム(二)迄.....

法學博士

河上肇

職工組合論(二).....

法學士

河田嗣郎

我國^{ニ於ケル}營利心ノ起源及發達(三).....

文學士

銅直勇

時事問題

米國禁輸問題ノ解剖.....

法學博士

神戸正雄

勸業及農工銀行ノ合併ニ就テ.....

法學博士

戸田海市

雜錄

大阪市ニ於ケル窮民ノ家計(二).....

法學士

櫛田民藏

續獨逸經濟學界近況(二).....

文學士

米田庄太郎

物價ト割引歩合トノ平行.....

文學士

高田保馬

米國ノ戰時海運政策(三)迄.....

法學士

岸本熊太郎

米國ノ戰時租稅法(二).....

在米

阿部賢一

帝國統一後ノ獨逸ノ植民の活動(上).....

文學士

山本美越乃

帝國統一後ノ獨逸ノ
植民の活動(上)

(本誌第五卷第三號『獨逸ノ植民
的發展ノ起源』續編)

山本美越乃

前世紀ノ中葉ニ至ル迄ハ獨逸ハ歐洲ニ於テハ
殆ンド孤立ノ地位ニ立チ、海上ノ發展ニ關シテ

ハすかんでいゝなびあ諸國及英國ノ咽喉ヲ扼スルアリ、又陸上ノ發展ニ關シテハ、澳・露等ノ背部ヲ壓スルアリ、海陸何レノ方面ニ於テモ其ノ自由活動ヲ妨グラレシガ、斯カル時代ニ在リテモ獨逸ノ先覺者等ハ植民事業ノ國運ノ進展ニ至大ノ關係ヲ有スルコトヲ力説シテ止マザリキ、然ルニ一八六四年ノ丁抹トノ開戦ハ北海ニ於ケル獨逸ノ活躍ニ自由ヲ與ヘ、次デ一八六六年ノ對奧戦争ハ南方ニ於ケル多年ノ患憂ヲ一掃スルコトヲ得、茲ニ初メテ孤立的ノ地位ヲ脱シ、今ヤ獨逸ハ政治上ニ於テモ經濟上ニ於テモ一大抱負ヲ實行シ得ベキ時機ニ到達セシガ、一八七〇年乃至七一年ノ普佛戦争ハ更ニ之ニ勢援ヲ與ヘ、帝國統一事業ノ完成ト共ニ獨逸國民中具眼ノ士ハ新タニ海外發展ノ必要ヲ唱導シテ止マザリシト雖ドモ、當時國內ニ於テ最モ勢力ヲ有シタルビすまるくハ之ニ贊セズシテ、人若シ彼レニ植民事業ノ必要ヲ提言スル時ハ『予ハ性來植民主義者ニ非ズ』トノ一言ヲ以テ之ヲ斥ケ、又嘗テ亞弗利加探險者ノ一人タリシげるはるど、るるふ

す (Gerhard Rohls) ニ對シテモ、『吾人ハ植民事業ヲ欲セザルノミナラズ又之ヲ爲シ能ハザルモノナリ、獨逸ハ佛國ノ如クニ植民的ノ活動ニ必要ナル艦隊ヲ準備スルガ如キコトナカルベシ、獨逸ノ勞働者モ法律家モ軍人等モ植民事業ニ關シテハ不適當ナリ』ト告ゲ、最初ハ容易ニ植民問題ニ耳ヲ傾ケザリシガ、皇帝ガゐるへるむ二世ノ大望及海外發展ニ對スル輿論ノ後援ハ終ニびすまるくヲシテ其ノ所信ヲ抛擲セザルヲ得ザルニ至ラシメタリ、蓋シ帝國統一後獨逸ハ漸次國力ノ増進ニ伴ヒ植民的發展ノ切要ヲ感ジ來ルト、恰モ此ノ當時ヨリ獨逸國民ノ海外ニ移住スル者年々増加シ、從テ之ニ對スル適當ノ保護方法ヲ講ズルノ必要頗ル大ナルニ至レルヲ以テナリ。

由來獨逸ノ移民ハ世界ノ各地ニ分散セズシテ常ニ一定ノ地方ニ集合シ、斷エズ本國ト密接ナル關係ヲ保持セントスルノ風アルヲ以テ、其ノ實質ニ於テハ殆ンド植民ト異ナルコトナク、唯本國ガ未ダ是等ノ地方ニ對シテ領土權ヲ有スル

ニ至ラザリシヨリ移民ヲ以テ目セラレタルニ過
 ギザルノ觀アリ、故ニ獨逸國民ノ海外發展ノ歷
 史ニ於テハ移民ハ植民ノ先驅ヲナシタリト稱ス
 ルモ不可ナシ。

獨逸國民ノ海外移住ノ風漸ク旺ンナラントス
 ルヤ、當時ノ識者ノ一部ニハ是等ノ移住者ノ本
 國ニ與フル利益ハ到底其ノ損失ヲ償フニ足ラズ
 トナス説行ハレ、若シ之ヲ自由ニ放任セバ將來
 國際競爭場裡ニ立テテ有力ナル戰鬪員タルベキ
 者ヲ徒ラニ他國ニ奪ハルルノ結果ヲ生ズベシト
 ナシ、極力之ニ反對セントスル者ヲ生ゼシガ、何
 ンゾ知ラン獨逸ノ移民ハ前述ノ如ク假令其ノ國
 籍ヲ脱シテ他國ニ移住スルモ、尙ホ依然トシテ
 本國ト密接ナル關係ヲ持續シ、所謂『獨逸主義』
 ("Deutschtum")ナル一語ニ依リテ代表シ得ベキ
 一切ノ習慣及國風ヲ機會ニ乗ジテ到ル處ニ播植
 セズンバ止マザルノ氣慨ヲ有シタルヲ以テ、嘗
 テ國民ノ海外移住ニ反對シタル論者等モ後ニ
 ハ却テ其ノ必要ヲ認メザルヲ得ザルコトナレ
 リ、此ノ如クニシテ獨逸ノ移民ハ啻ニ過剩人口

及過剩生産物ノ處分ニ關シテ本國ニ有形的ノ利
 益ヲ與ヘタルノミナラズ、更ニ智力及思索力等
 ニ於ケル本國ノ無形ノ勢力ヲ世界ノ各地ニ傳播
 スルノ媒介ヲ爲シ、然カモ彼等ノ多クハ將來本
 國ノ政治的勢力ノ扶植ニ便ナル地方ニ向ヒテ發
 展セントスルノ傾向アリシヲ以テ、國民ノ植民
 的ノ思想ハ茲ニ一層有力ナル後援ヲ發見スルニ
 至レリ。

前世紀ノ中葉以降獨逸ニ於ケル人口ノ増加ハ
 移植民的ノ活動ニ大ナル刺戟ヲ與ヘタルト共
 ニ、又他方ニ於テハ從來農業國タリ森林國タリ
 シ獨逸ガ僅々四半世紀ニ充タザル短日月間ニ能
 ク産業上ノ一大革命ヲ成就シ、一躍シテ商工業
 的國民タリ海國民タルノ地位ヲ獲得スルニ至リ
 タルコトモ植民的發展ノ必要ヲ更ニ切ナラシメ
 タルコトハ之ヲ疑フ可カラズ、於茲乎、一八七一
 年ふらんくふるとノ和議成ルヤ、獨逸ノ經濟學
 者・商人・探險者及政論家等ハ互ニ協力シテ政府
 ニ迫リ、佛國ヨリあるせり！・交趾支那及ぼんで
 いせりー(佛領印度)ヲ割讓セシメ以テ自國ノ植

民地トナスベキコトヲ提言シタルモ、必ずまるくハ『獨逸ハ植民地ヲ要セズ、吾人ハ高價ナル皮裘ヲ纏フテ其ノ外觀ヲ飾ルモ、内ニハ一ノ褌衣ダモ着セザル彼レ波蘭ノ貴族等ノ如クナランコトヲ欲セズ』ト主張シ、斷然之ニ反對シタリ。

然ルニ一八七四、五年ノ交ニ至リテハ獨逸國民ノ海外移住ヲ企ツル者益々増加シ、殊ニきゝるん・ふらんく・ふると及らいぶちつひ等ニ於テハ是等ノ移住者ニ後援ヲ與ヘ、植民地獲得ノ準備ヲ爲サシメントスル目的ヲ以テ各種ノ協會ノ設立ヲ見ルニ至リタリト雖ドモ、政府ハ議會ニ於テ屢々植民事業ニ對スル反對ノ意見ヲ述ベ毫モ輿論ニ耳ヲ傾クルコトヲ爲サズ、當時獨逸ハ海外ニ於ケル領土獲得運動ニ關シテハ全ク監視者ノ地位ニ立チ、自ラ斯カル運動ニ加ハラントスルガ如キコトヲ爲サズ、彼ノ一八七四年及同七年ノかるりん群島及ばらう島ノ通商問題ニ關スル英・獨協同ノ西班牙ニ對スル抗議ノ如キ、又一八七四年ノ英國ノふいじー島併合ノ場合ニ於ケル獨逸ノ態度ノ如キハ之ヲ證シテ餘リアリ。

政府當局ハ上述ノ如ク植民事業ニ關シテハ消極主義ヲ固守シタルニ拘ラズ、民間有志ハ之ニ反シテ積極主義ヲ持シ、殊ニ其ノ實行上ニ頗ル有力ナル聲援ヲ與ヘタル者ハ個人トシテハリバにうす(Livonius)及ふあぶりー(Fabrit)等ノ熱烈ナル植民論者、團體トシテハ伯林ニ於ケル商業地理及獨逸海外事業獎勵中央會(Zentralverein für Handelsgeographie und Förderung deutscher Interessen im Auslande)及でめすせるるふニ於ケル西獨逸植民及輸出協會(Westdeutsche Verein für Kolonisation und Export)等ナリキ、(前者ハ一八七八年ニやんなつし(Jannasch)ニ依リテ設立セラレ、後者ハ一八八一年ニふあぶりーニ依リテ創設セラレタル植民事業獎勵ノ機關タリ)。此ノ如クニシテ獨逸國民ノ植民熱ハ次第ニ高潮ニ達シ、遂ニ皇帝及らいん地方ノ工業者ノ後援ノ下ニ一植民團體ノ組織ヲ見ルニ至リシガ、其ノ成立ニ與カリテ力アリシ者ハひゆつべし(フービデン(Hübner-Schleiden)・ほーへんろー・らんげんぶるぐ侯(Fürst Hermann zu Hohenlohe-

Langenburg) 及まるゝあん (Maltzan) 等ニシテ、彼等ハ從來各地ニ散在セル植民事業ノ聲援者ヲ糾合シテ一ノ有力ナル團體ヲ組織セシメ、之ニ依リテ更ニ廣ク植民思想ヲ國內ニ普及セシメンコトニ努メタリ、一八八二年八月ふらんくふるニ開カレタル準備委員會ハ全國ニ宣言書ヲ發シテ、海外各地ニ於ケル獨逸國民ト本國トノ關係ヲ益々密接鞏固ナラシメンガ爲メニ是等ノ地方ニ對スル商業の交通ヲ一層壯ンナラシムルノ必要アルコト及今ニシテ躊躇スルアラシカ獨逸ハ他國ノ爲メニ機先ヲ制セラレ遂ニ海外發展ノ機會ヲ逸スルニ至ルベキコトヲ論ジテ輿論ヲ激勵シ、斯クシテ同年十二月は一へんろーへ、らんげんぶるぐ侯ヲ會長トセル獨逸植民協會 (Deutscher Kolonialverein) ヲ伯林ニ設立シ、茲ニ新タニ植民の活動ヲ開始スルニ至レリ、爾來同協會ノ活躍ハ國民ニ植民思想ヲ鼓吹スルニ與カリテ大ニ力アリキ。

次デ一八八四年ニハ亞弗利加ニ於ケル植民地問題ニ關シテ國際會議ヲ伯林ニ開キ、びすまる

くハ之ガ議長トシテ有名ナルこんでー獨立國ノ創設ヲ承認シタル事ハ、從來植民事業ニ對シテ比較的冷靜ノ態度ヲ持シタル人々ノ間ニスラ、今ヤ該問題ノ頗ル興味アル研究題目タルコトヲ悟ラシムルニ至レリ、事態此ノ如クナリシヲ以テ政府ハ未ダ自ラ積極的ニ植民事業ニ着手スルニ至ラザリシトハ謂ヘ、尙ホ個人的ノ企畫ニ對シテハ相當ノ援助ヲ與ヘザルヲ得ザルコトナレリ、然レドモ議會ハ之ヲ喜バズシテ恰モ當時其ノ議ニ上リタル極東及太平洋航路ニ對スル補助金交付ノ請求ノ如キモ斷然之ヲ拒絕シタリ。

然ルニ同年五月ぐすたふ、なはていはる (Gustav Nachtigal) ノ西部亞弗利加ニ於テ帝國ノ名ニ依リテ土地ヲ占領セントスルヤ、びすまるくハ彼ニ一書ヲ送リテ曰ク、『有力ナル海軍國トノ紛爭ノ危險ヲ冒スモ尙ホ獨逸國民ノ商業の企業ヲ援ケンガ爲メニ、新タニ獨逸ノ官吏及軍隊ヲ新占領地ニ送り、茲ニ完全ナル一ノ統治機關ヲ設定セントスルガ如キコトハ政府ノ意志ニ非ズ、吾人ハ唯修交・通商及保護條約ノ範圍内ニ於テ

ノミ獨逸國民ノ保護ニ任ズベシ』ト、又同年六月議會ニ於テモ同一ノ主旨ヲ宣明シテ曰ク、『予ハ土地ヲ獲テ此所ニ官吏及軍隊ヲ置キ以テ移住者ヲ招致セントスルガ如キ舉ニ贊スル能ハザルガ故ニ、植民地ノ創設ニハ極力反對スル者ナリ、然レドモ國內ニ於ケル過剩ナル人口ノ自然的出路ヲ發見センガ爲メニ植民事業ヲ計畫セル人々ノ國家ノ保護ヲ要求スル場合ニハ、之ニ對シテ相當ノ保護ヲ與フルノ義務アルコトハ白ラ別箇ノ問題ニ屬ス』ト、此ノ如クシテ當初ハ極メテ強硬ナル態度ヲ持シタルビすまゝモ、今ヤ植民事業ニ對シテ次第ニ其ノ意見ノ緩和セラレントスル傾向アリシコトハ、更ニ『皇帝及予ノ意志ハ植民地ノ設定及其ノ實質上ノ發達ニ關スル全責任ヲ對外通商ノ爲メニ努力シツツアル人々ニ一任セントスルニ在リ、然レドモ是等ノ人々ニ依リテ建設セラレタル植民地ニ對シテハ、英國ノ特許狀ニ類スル特許證書ヲ與フルコトハ之ヲ爲サズシテ、是等ノ地方ハ獨逸帝國ニ併合セラルベキモ其ノ統治ニ付キテハ政府自ラ直接之ニ關與

セザルヲ得策トス、而シテ各植民地ニハ政府ノ代表者トシテ領事又ハ駐劄官ヲ置クモ、彼等ノ任務ハ唯各種ノ訴ヲ受理スルニ止マリ、商人間ノ係爭事件ニ關シテハふれーめん・はんぶるひ其他各地ニ設ケラレタル海事及商事裁判所ヲシテ之ヲ審判セシムベシ、要スルニ吾人ノ意見ハ最初ヨリ植民地ヲ政府ノ統轄ノ下ニ置カズシテ、唯植民事業ヲ保護シ其ノ發達期間中ハ外敵ノ侵畧及列強ノ妨害ニ對シテ之ヲ擁護セントスルニ在リ、此ノ如クセバ假令該事業ノ不成功ニ終ルガ如キコトアリトモ、政府ノ失フ所ハ極メテ小ナルベケレバナリ』トノ宣言ニ徴スルモ之ヲ窺フコトヲ得ベシ。

獨逸國民ノ植民の活動ニ對スル最も有力ナル反對者ノ一人タリシビすまゝモ、國論ノ嚮フ所ニハ之ニ抗スルコト能ハズシテ、遂ニ植民事業ニ對シテ相當ノ保護ヲ與フベキコトヲ誓言スルニ至ルヤ、國民ノ海外發展ヲ企ツル者俄カニ増加シタルヲ以テ、一八八四年ニハかゝる、べてるす(Karl Peters)ハ伯林ニ獨逸植民會社(Gesell-

Ischaft für deutsche Kolonisation)ヲ設立シテ、是等ノ海外移住者ノ爲メニ農業及商業植民地ノ建設ヲ計畫スルニ至レリ、然レドモ氣候・風土等ノ諸種ノ關係ヨリ考察シテ斯カル移住者ノ定住ニ適スベキ地方ハ既ニ他國ノ先占ニ屬シ、獨逸及伊太利ノ植民事業ニ着手シタル當時ニ在リテハ中央亞弗利加及南洋ニ於ケルにゆゑに該地方ヲ除ク外ハ、自由ニ自國ノ勢力ヲ扶植シ得ベキ土地存セザリシヲ以テ、獨逸ハ急遽是等ノ地方ヲ占領センコトニ努メ又能ク其ノ目的ヲ達スルコトヲ得タリ、而シテ其ノ最初ノ遠征者ハ實ニべてるすニシテ、彼ハ獨逸植民協會ヲシテ獨逸植民會社ト提携セシメン事ヲ企テタルモ失敗ニ終リシヨリ、一八八四年十一月ざんじはるノ對岸東亞弗利加地方ヲ探險シテ土民ノ酋長ト協議ヲ遂ゲ、特ニ其ノ目的ヲ以テ設立セラレタル獨逸東亞弗利加會社(Deutsch-Ostafrikanische Gesellschaft)ノ爲メニ最モ有利ナル條約ヲ締結シテ、茲ニ獨逸東亞弗利加ノ基礎ヲ据ユルニ至レリ。尤モ之ヨリ先キ既ニ一八八二年ニリゅうでり

つつハ亞弗利加ノ西南海岸ニ於ケルあんぐら、べけんや灣ヲ僅ニ二百馬克ノ代金及一挺ノ銃ヲ以テ該地方ノ酋長ヨリ購ヒタルコトアリ、此ノ最初ノ獲得地ハ一八八五年四月本國政府ニ讓渡セラレシガ、之ト相前後シテ西部亞弗利加ニテハかめるん及どーびーノ占領行ハレ、又東部亞弗利加ニ於テハ前述ノ如クべてるすノ植民の活動功ヲ奏セシヲ以テ、今ヤ亞弗利加大陸ヲ中心トセル太平洋上ニ於ケル獨逸ノ勢力ハ拔ク可カラザル根柢ヲ有スルニ至レリ、加之、一八八四年十月ニハ嘗テ英國ノ航海者うゐりあむ・だむびーあ(William Dampier)ニ依リテにゆゑりてんと名ヅケラレタル(一七〇〇年)南洋諸島ヲ占領シテびすまろク群島ト命名シ、更ニ翌八五年ニハ英國兩國トにゆゑに該島ヲ分割シテ其ノ北部ヲ領シ、之ヲかいざー・ぐあるへるむすらんぞト稱セリ、其ノ後久シカラズシテ獨逸ハまーしやる・かろりん・まりあなノ諸群島及るもあ群島中ノ二大島(うぶる及さわい)ヲモ之ヲ其ノ手中ニ收メ、此ノ如クシテ南洋方面ニ於ケル獨逸ノ政治上及經濟上ノ勢力ハ一層鞏固ナルヲ得タリ。